

道風

道風記念館だより

第62号

発行日
令和四年三月十五日

編集・発行

春日井市道風記念館

春日井市松河戸町五―九―三

電話(〇五六八)八二―六一〇

新・本朝能書伝 7 藤原定家

古谷 稔

「能書」とは「能」の字義に、才芸がすぐれている意味があることから、文字を書くのに巧みな人のことをいう。能筆ともいう(小松茂美編『二玄社版・日本書道辞典』・神崎充晴解説)との見方がなされている。

平安中期の名筆家・藤原行成を祖とする世尊寺家六代・伊行が著した『夜鶴庭訓抄』には、「能書人々」として弘法大師以下二四名を紹介する。同時に内裏の門額を書いた人々、大嘗会の儀式で用いる悠紀主基御屏風色紙形の筆者など、当時の能書の偉業を披露する。

本連載で扱う能書の選別は、必ずしも右に示すような書道の名家が位置づけた能書にこだわらず、自由な立場で採用している。

今回は藤原定家(ていけい)へいか・一一六二―一一二四)について眺めてみたい。定家は藤原俊成の子。鎌倉初期を代表する歌人、歌学者。初め光季、次に

季光、さらに定家と改名し、天福元年(一一三三)出家して明静と号した。官位は正二位・権中納言を極めた。

歌人としては、元久二年(一一〇五)後鳥羽院の勅撰になる『新古今和歌集』、および貞永元年、後堀河天皇の勅撰になる『新勅撰和歌集』の撰者をつとめるなど、歌壇の重鎮として活躍し、自らの和歌を収めた家集『拾遺愚草』も知られている。

また、『古今和歌集』『後撰和歌集』『源氏物語』など、歌集や物語の書写校訂を行うほか、『近代秀歌』『詠歌大概』などの歌論を著した。一方で、自筆本の日記『明月記』は、歴史資料として重要視されているが、近年新たに冷泉家時雨亭文庫において大量の自筆本が発見され、一段とその価値を高めている。

これ以外でも自筆の書状や和歌会の清書本「熊野懐紙」などを残し、定家特有の定家流とも呼ばれる書風を確立して一つの書流を樹立した。後世、小堀遠州(二五七九―一六四七)や松平不昧(二七五一―一八一八)は、熱心な定家流継承者として、茶の湯の世界にも君臨している。定家の孫・冷泉為相(二二六三―一三二八)は冷泉家の

の祖であり、その子孫・冷泉為村(一一七一―一七七四)は定家流を受けた独特の書風を形成している。

定家といえば、文化史上、「小倉百人一首」の著者として名高い。同書は、鎌倉時代の秀歌選、藤原定家撰。「小倉山荘色紙和歌」「百人一首」などの別称がある。その成立は、文暦二年(一一三五)五月、また、文暦二年九月以後家隆が没する嘉禎三年(一一三七)四月以前などの説がある。

定家の主張した歌論と茶道の精神が融合し、室町時代の茶人・武野紹鷗(二五〇二―一五五五)が初めて定家筆と伝える「小倉色紙」を茶席の掛け物として用いている。紹鷗は三条西実隆に歌学を学び、村田珠光の茶の湯を宣揚し、その弟子・千利休が珠光から道を学び得たとされ、茶の湯の成立は紹鷗にかかると考えられている。

現存する「小倉色紙」と伝えるものは、管見に及ぶ範囲において、真筆・模写・偽筆などの解釈で諸説が混在する。一貫していえることは、一枚の色紙に作者名を省き、和歌一首四行書きの書式をとっている点である。

定家の日記『明月記』の文暦二年(一一三五)

五月二七日の条を読み下してみよう。

予、もとより文字を書くことを知らず。嵯峨中院の障子色紙形、ことさらに予に書くべき由、彼の入道懇切なり。極めて見苦しきことといえども、なまじいに筆を染めてこれを送る。古来の人の歌各一首、天智天皇より以来、家隆・雅経に及ぶ。

文中、「嵯峨中院」とあるのは、定家の子為家の岳父にあたる宇都宮弥三郎頼綱（蓮生入道・一一七二—一二五九）の別荘を指し、定家の小倉山荘の近隣にあったといわれる。「彼の入道」すなわち蓮生は、この新築の別荘の障子に貼りめぐらすため、定家に色紙形の揮毫を要請した。定家は自ら「もとより文字を書くことを知らず」と、一度は能書に及ばずと拒否の念を示したものの、相手の懇願に押され、蓮生への責を果たした。こ



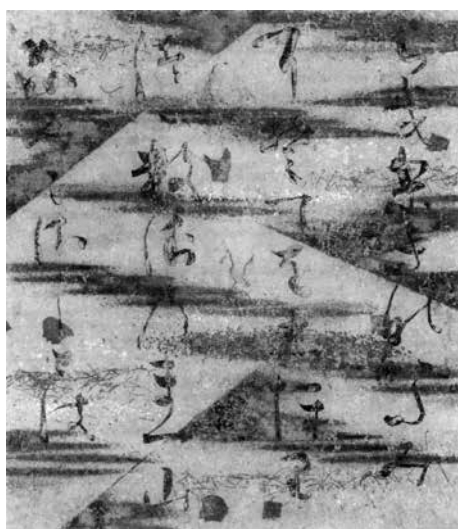
① 藤原定家 小倉色紙「これやこの」（東京国立博物館蔵）

こでいう障子は、今日のそれではなく、襖障子、唐紙障子に相当するものである。

次に「小倉色紙」と称される二、三の遺品を示す。①「これやこの」（東京国立博物館蔵）は一八・〇×一六・一センチ、②「ちぎりきな」（藤田美術館蔵）は一八・五×一六・四センチ、③「こひすてふ」（徳川美術館蔵）は一八・三×一五・三センチの以上三点は、ほぼ同寸法である。料紙は、①が胡粉地の唐紙、②が金銀切箔砂子の裝飾紙、③が素紙を継ぎ合わせたもので、それぞれ料紙に違いが判明する。

小松茂美著『古筆学大成』（一六）では、「小倉色紙」の現状と書風から見て、

（一）十代（下書き）・（二）清書本・（三）後世の模写、の三種に大別する。同著では、図版として掲げ

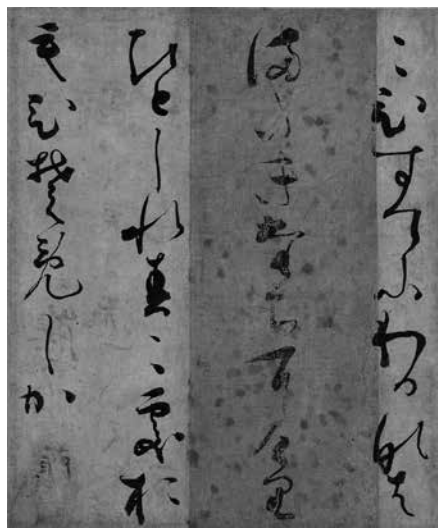


② 藤原定家 小倉色紙「ちぎりきな」（藤田美術館蔵）

た①は（二）清書本で唐紙の色紙（模写か）と見て区分する。ただし、原型本は『集古十種』に掲載の「これやこの」模刻本「東本願寺家人松井出雲蔵」の「金銀の砂子・切箔・野毛を散らした料紙」の系統を汲むと見る。②は（二）清書本で金銀切箔砂子の裝飾紙に書し、③は（一）素紙を用いた十代（下書き）とする。稿者は図版の①②③を、いずれも定家自筆と見ている。

「小倉色紙」の名は定家の在世中にはまだなく、現存の「小倉色紙」が嵯峨中院の障子色紙形であるかどうかも確証は得られていない。

嵯峨中院の障子色紙形を書した時期と同じ文暦二年に、定家は「貫之自筆本土佐日記」（前田育徳会蔵）を書写し、その七四歳の筆と確認される。名児耶明論文では、「明月記」記事と併せて、七〇歳頃から七四歳の間に中風により線にふるえ



③ 藤原定家 小倉色紙「こひすてふ」（徳川美術館蔵）

を露呈する点を指摘して「貫之自筆本土佐日記」と「小倉色紙」との書風比較を試み、定家自筆に一番近い「小倉色紙」は、前掲③「こひすてふ」を含む五点（前掲の土代〔下書き〕に相当）であると結論づける（「定家様と小倉色紙」和歌文学論集9）。

ここで、図版①「これやこの」（東京国立博物館蔵）に触れておこう。本色紙は、胡粉地に唐草の雲母型文様を刷りだした唐紙を使用する。定家自筆「十五首和歌」（六六歳の筆・前田育徳会蔵）に酷似し、「土佐日記」（七四歳の筆・前田育徳会蔵）のように枯れた書風ではないが、筆意が類似し、定家六〇代後半〜七〇代初めの筆と推考される。また、四行目「相」字が定家自筆の「相模集」（六六歳の筆・東京富士美術館蔵、表紙題字の「相」字と同じ筆意が把握できる。

和歌の本文は、「これやこのゆくもかへるもわかれつつ しるもしらぬも相坂のせき」（『百人秀歌』所収）と四行に書す。一方の『百人一首』では第三句目の「つつ」を「ては」としており、二字分の異同が認められる。本件については拙稿（古谷稔「東京国立博物館本（小倉色紙）の書写年代考」『水荃』2号）を参照されたい。

なお、「これやこの」色紙に関し、小松説（前掲著書）では、一群の遺品中に本色紙と同類文様の唐紙遺品が見えず、定家時代とするには決断に窮する、と否定的な見解を示す。

これに対して、久米康生著『京からかみ文様譜』（思文閣出版）の指摘に注目したい。文治四年（一一八八）年、後白河院の勅撰になる『千載和歌集』（藤原俊成撰）の巻第一八・物名に、「からかみのかたき」と題し、「よととも心に心をかけ



藤原定家「十五首和歌」〔重要文化財〕（66歳の筆・前田育徳会蔵）

て頼めども我からかみのかたきしるしか」を例示し、「からかみのかたき」すなわち唐紙の板木（版木）の存在を見出している。文治四年は定家の二七歳に相当する。和製唐紙は、一二世紀初めの「本願寺本三十六人家集」や「元永本古今集」などに見え、俊成の時代を経て定家が活躍した一二世紀後半から一三世紀半ばにかけても書の料紙に用いられたと推察できよう。

東京国立博物館本「小倉色紙」は、図版の「ちぎりきな」や「こひすてふ」が、定家七四歳頃の



藤原定家 奥書「相模集」〔重要文化財〕（66歳の筆・東京富士美術館蔵）

© 東京富士美術館イメージアーカイブ / DNPartcom

筆とすれば、それとは異なり、定家六〇代後半から七〇代初めの筆と推定され、一字一字切り離して綴った和歌は、豊潤で内に力のこもった書風といえる。

定家の書写活動は、自筆日記『明月記』をはじめ、和歌集・日記文学・物語・歌論・書状・和歌懐紙など、その時々に応じてその場に相応しい魅力的な書法が展開されており、今日にも多くの遺品を確認できる。

（東京国立博物館名誉館員 ふるやみのる）

令和4年度 スケジュール（前期）

3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
館蔵品展「花を愛でる」 3月10日～5月15日 ・春の花を詠んだ詩歌を書いた作品を展示。			館蔵品展「書の魅力」 5月18日～7月10日 ・書のような魅力を紹介し、鑑賞方法を提案する展覧会。		企画展「おののとうふう」 7月15日～9月4日 ・子どもにもわかりやすく小野道風を紹介。 ・ワークショップを実施。		特別展 「比田井南谷 ～線の芸術～」 9月9日～10月16日	
「書にふれる、はじめての講座」 5月～7月			臨書講座「高野切をかく」 6月					
常設展示 小野道風をはじめとする平安時代の書について								

※内容・会期等を変更することがあります。

展覧会案内

館蔵品展「花を愛でる」

四季折々に咲く美しい花は、万葉集や古今和歌集などの古歌から現代の短歌・俳句に至るまで、古くから詩歌として謳いあげられ、愛でられてきました。そして書画の世界においても、花は一大テーマとして精彩を放っています。

本展では、館蔵品の中から春の花を詠んだ詩歌を書いた作品を展示します。文字の造形や余白、書線の美しさといった書表現を味わいながら、詩歌を味わい、春の花を愛でていただきたいと思います。

- ◆会期 令和4年3月10日(木)～5月15日(日)
- ◆観覧料 一般 100円、高校・大学生 50円、中学生以下 無料
- ◆展示品解説 3月13日(日)、4月24日(日)

※新型コロナウイルス感染拡大状況により、
開館日や開館時間などの変更になる場合があります。
ホームページなどでご確認の上ご来館ください。

